

戦間期日本の大陸政策と野談市場の拡張

—1930年代ユン・ベクナムの野談大会を中心に—

The Expansion of the *Yadam* Consumption Market and Japanese Expansionist Policy during the Interwar Period: focusing on Baeknam Yun's *Yadam* provincial performances in the 1930s.

朴 多情*

Dajeong Park

1. はじめに

1990年代後半より、近代に対する根本的な批判を踏まえて、植民性と近代性が近代の両面をなしていることを前提にした植民地近代性研究が行われ始め、研究の枠組み自体を地域体制の観点へ転換させ、国民国家の枠組みでは説明できなかった近代性の諸問題に対する答えを探索する試みが活発に進められてきた (Barlow, 1997; Shin & Robinson, 1999; Mignolo, 2000; 水野直樹, 2002)¹。日本、朝鮮、中国、台湾等の「国境を横断する人々と彼らの行為、そして思想が空間的に連環する様相」(伊藤・坂元・バーロウ, 2010: 10) を追跡した、いわば東アジア的な観点から行われた一連の植民地近代性研究は、一国の国民国家内において「植民性と近代性どちらが優位なのか」を選ぶ作業ではなく、多方向的につながっている植民地的近代社会の日常を明らかにすることにその目的がある。

映画研究の場合、植民地朝鮮の映画市場がトーキー技術の発達とともに東アジア市場内でのどのような位置に置かれたか、という問題に対する研究²が活発に行われている。しかし、本研究の対象である野談が論じられる場合、その消費された地域はもっぱら植民地朝鮮内に限定される傾向があり、その際、議論の焦点は「野談が大衆の支持を得られたのは朝鮮的色彩が強い民衆娯楽だったからである」ということに当てられてきた。そして戦争期に持ち越されると、「このような朝鮮的な色彩が戦争にどのように動員されたのか」という問題の立て方へ容易に議論が滑ってしまう。消費大衆が皇国臣民への変貌を強いられる過程に注目するこのような傾向は、野談研究のみでなく、従来の植民地大衆文化研究の大きな流れの一つである。しかし、1920～30年代半ばの消費大衆と、30年代後半～40年代の戦争期の皇国臣民として植民

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：野談、植民地近代性、大衆文化、日本の膨張政策、東アジア地域体制。

地朝鮮の人々を時期的に分ける作業は結局、前者を近代性が優位にあった時期、そして後者を植民性が高まった時期に分けて、近代性と植民性を別のものとして済ませようとした過去の研究傾向の繰り返しに過ぎない。つまりそれらの研究傾向の繰り返しに過ぎない。つまりそれらの研究は近代性を、いわばその影の暗がりとしての植民性の対蹠点に置かれた、近代の華やかな部分として認識するのである。実際、1990年代後半と2000年代韓国の植民地時期日常研究が新たに光を当てようとしたのがこの「華やかな近代性」であり、その空間はほとんど1930年代の京城に限られていた。しかし本研究は、従来の研究が区切った近代性と植民性が、実のところはいつも共存しており、植民地朝鮮の人々の日常を構成し、なおかつその日常は1930年代の京城のみでなく、植民地時期を貫いて、植民地朝鮮の農村にも、また農村から離脱し、近代の波に押されて越境した人々にもあったことに着目する。そうした人々はみずからの日常を、国境を越えた地域で様々な仕方でき生きていたのであり、その中には野談の主消費層も含まれていたのである。彼らの越境を駆り立てたのは何であったのか、より正確には、当時の大衆文化の越境がそれを担う人々の越境とともに可能であったならば、または逆に、越境が制限されたならば、それぞれの条件は何であったのか。そしてこれらの条件を分析することにより、東アジア的観点から、大衆文化の消費市場を描き出すことができるのではないかと。本稿はこのような問題関心から、野談の消費市場が日本の大陸政策とどのような関係の中で拡張されたのかを追跡する。

朝鮮の伝統的叙事ジャンルである野談は少数

の人々が集まった「イヤギパン（語り合いの場）」で口伝の昔話や日常の逸話を交わしながら楽しむ形式であった。朝鮮後期の「イヤギパン」で専門的な話者である語り手たちが生まれ始め、支配階層である両班たちが開いた「イヤギパン」に庶民の語り手を呼んで楽しむ趣味が生まれて、そこで聞いた話を両班が漢字で記録してから野談は漢文で書かれた漢文短編小説の形を持つようになる。そして野談という名称が初めて文献上で確認できるのも16世紀半ば漢文で書かれた柳夢寅の『於于野談』である。「イヤギパン」は、少数の人々が互いに話を取り交わしたり、語り手の話を楽しむ空間であった。基本的に語り手と聞き手がいたが、その関係は一方的ではなく、大規模の聞き手を相手にする公演の形式でもなかった。つまり、前近代野談はfolk taleが口伝文学から文字文学へと切り替わる姿をよく示す代表的な事例である。

本格的な分析に入る前に、まず次章ではfolk tale的な前近代野談が近代に入り、変貌して行く過程を、近代野談の代表的な主役であるキム・ジンギとユン・ベクナムを中心に説明する。その上で、3章からはユン・ベクナムの野談大会（野談公演）へ焦点を絞り、野談市場の拡張を具体的に分析する。1930年代は印刷、通信といった新しいメディアが発展した時代であったにもかかわらず、本研究が最も原初的なメディアといえる身体メディア＝公演に注目する理由は、もちろん当時大衆文化の越境が顕著に表れたのが巡回野談大会だったからであるが、そのみではなく、本論文では扱えないものの、のちの戦争期には身体メディアこそが最も効率的に市場の拡大を達成したのであり²、そ

れを論証する今後の課題との連結性をも考慮したからである。分析対象は主に1931～1936年、『東亜日報』主催のユン・ベクナム野談巡回公

演である。野談大会の場所は京城をはじめとする『東亜日報』支局があった地方の諸地域であった。

2. 近代野談の誕生と変貌—キム・ジングからユン・ベクナムへ

植民地朝鮮の近代野談は1927年11月、キム・ジングによって宣言された啓蒙運動（『東亜日報』1927.11.25）であった。日本留学の折、自由民権運動家である宮崎滔天の浪花節活動など、啓蒙思想の大衆浸透を目的に、大衆文化を一種の手段として活用する事例に接したキム・ジングは帰国後、日本の社会講談⁴の、伝統的芸能ジャンルの改造を通じて民衆教化を果たす方式を反映し、それに朝鮮の伝統的な物語ジャンルであった野談の名だけをつけて野談運動を展開していく（『東亜日報』1928.1.31）。野談運動の目的は、植民地朝鮮の大衆が理解しやすい物語を通じて、朝鮮を植民地に転落させた朝鮮支配層の前近代的弊害を周知させ、近代化された朝鮮を創出して植民地状況から脱却できる大衆的力を育てることであった。キム・ジングが新聞を通じて明らかにした野談論の三つの核心は、朝鮮的、民衆的、そして歴史的であった。まず彼は、朝鮮支配層の無能さの原因を中華思想への過度な偏向に見出した。中華思想を朝鮮支配層の思想として見ていた彼にとって、中国の古史と朝鮮の正史は民衆開化のためには全く役立たないものであった（『東亜日報』1928.2.1、2.2、2.4、2.5、2.6）。彼は野談の誕生を朝鮮野談社創立と同一視した（『東亜日報』1928.2.1）が、これはそれに先立つ伝統的野談と彼が宣言した近代野談がまったく異なるもの

であることを強調するためであった。前近代野談集である『青邱野談』と『於于野談』を「根柢もないものをでたらめに書いておいた書冊」（『東亜日報』1928.1.31）と表現したことからも分かるように、歴史的事実に基づいていない前近代野談もキム・ジングにとって民衆教化には使いみちがないものであった。結果的にキム・ジングは正史から排除された、歴史的事実を基盤にした民衆野史と当時失敗した近代開化史に注目したのである。

植民地朝鮮において1920年代とは文化統治期間であり、朝鮮総督府の統制下で言論の自由が制限された状態ではあったが、1910年代までは禁止されていた朝鮮の民族資本による民族新聞の創刊が許可され、植民地社会の最も重点的なメディアとして急成長し、この民族新聞の紙面と資本が中心となって近代化を目指した各種社会運動が活発に展開された時期である。野談運動もこのような流れの中で新聞紙面を通じて大々的な広報と作品発表を開始する。しかし、1920年代植民地朝鮮の大衆の識字率は低く⁵、したがって、新聞メディアに対する大衆の接近性も低かった。それ故、キム・ジングと新聞資本は野談運動の開始時から、一方では新聞紙面を通じて作品発表を、他方では新聞資本の支援を通じて野談公演である野談大会を同時に進めた。実際、野談運動初期には、文章で書

かれた野談作品発表より、聞くだけで分かる野談大会が運動の主な活動であった。新聞の紙面は主に、野談運動の意義を伝え、野談大会の広報手段として活用されたのである。

野談大会は、当時二大民族新聞であった『東亜日報』と『朝鮮日報』の後援を受け、京城と地方都市で開催された。野談大会が計画されると開催日まで新聞紙面にその日程が引き続き広報され、新聞購読者には入場無料、または割引入場券が提供されることもあった。野談大会が終わると、写真とともに、大会の興行を報告する記事も頻繁に掲載された。また、野談家による野談大会後の所感、野談に対する意見なども特集記事として企画連載された。このような新聞資本による野談大会の主催、後援、広報、後日談紹介にまで至る新聞資本と野談の関係は1920年代から40年代まで続いた。

初期の野談大会はキム・ジング単独、あるいは三、四人の口演者が順番に演壇に立ち、朝・中・日の近代化の主役、民衆反乱の主役、そして外国勢力の侵略に対抗した民衆の話を語るのが基本的な枠組みであった。1928年2月6日に『東亜日報』後援で開かれた朝鮮野談社新春野談大会の口演者別野談のタイトルを見てみよう。「東洋風雲を起こした東學亂、李敦化／韓末豪傑大院君、權憲奎／李鴻章と伊藤博文、金翊煥／金玉均王國、金振九」。まるで歴史教科書の近代チャプタのような構成で、近代東アジアの主要事件と人物を素材にしていることがわかる。つまりキム・ジングの野談は folk tale ではなく、historical story であったのだ。これは忠、孝、女性の貞節といった封建的価値や、鬼、動物を素材に奇妙な出来事、また日常の失敗や

誤解のエピソードなどを語る前近代野談とは全く違う種類の物語であり、洋服を着て演壇に立った演者が聴衆に向かって教えるように話す発話方式も新しいものであった。このようなキム・ジングの野談は、新聞社の後援と広報により大会の開催に対する話題性と大衆の興味誘発には成功したが、教化と啓蒙が目的であった物語が誰にも面白く受け入れられたわけではない。特に、キム・ジングをはじめ初期野談運動家たちは、社会運動家であったので、大衆を魅了させる芸能人的な資質が十分ではなかった。野談運動宣言後、1年余りが過ぎた1928年12月歴史教育講演のように多少面白みに欠ける野談大会に変化を起こす人物が口演者として登場する(『東亜日報』1928.12.7)。近代野談のスター、ユン・ベクナムであった。

ユン・ベクナムは野談運動団体である朝鮮野談社の創立1周年記念野談大会に口演者として初めて登場するが、彼がどのような目的で、誰の紹介でこの1周年記念野談大会に登場するに至ったのかは、記録が残っていないため不明である。1年余りが過ぎた野談運動は運動的な側面では成功したと評価することができたが、資本の面ではそれが実質的に商業的成功につながったのかは定かでなく、実際利益を創出したとしても、テーマの特性上、持続的な成功が保障された状況だったとは思われない。このような状況の中、ユン・ベクナムは彼の登場時から早くも、朝鮮野談社が求めてきた近代啓蒙的テーマから外れ、さらには野談運動宣言の核心であったあらゆる前近代的なものとの断絶を裏切り、中国の昔話「杜子春と金壺」を持ち出し、それによって野談は彼の登場を起点に完全に他

の方向性へ転換した。

ユン・ベクナムの野談家としての強みはまず、彼の豊富な文化芸術的才能であった。演劇界・映画界・文学界に深く関与し、様々な劇団を創立して、朝鮮の最初の劇映画（『月下の誓い』、1923）の監督と務め、朝鮮人初のプロダクション設立者（ベクナムプロダクション、1924）にもなり、彼の連載小説『大盗戦』（1930～31）、『黒頭巾』（1934～35）などは高い完成度で大きな人気を得た。とりわけ歴史小説の分野では韓国近代の最高の文人であった李光洙の唯一の競争者と評価されている（丁來東「三代新聞長編小説評論」『開闢』1953.3）。このように彼は物語の構成・創作に卓越した才能を持っていた。また、劇団では演出と脚本だけでなく、俳優としても活動し、ラジオ放送局では、幹部と声優の役割を同時にこなすほど演技にも才能があった。「彼の話はクライマックスに至ると音色に変化を加えながら演劇以上のものを思わせた」（ノ・ジョンパル、1984：63）という評価を見る限り、彼の野談は演劇的な発声と表現力で聞き手を魅了させたと思われる。このような芸人的才能とともに、彼の野談が大衆親和的で娯楽的性格を持つようになったもう一つの理由は、大衆に対する彼の観点にあった。ユン・ベクナムは既存のエリート文壇から絶えず「大衆小説家」という皮肉を言われたが、それは野談を含めた彼の作品が通俗的だったからである。こうした評価に対して彼は、非大衆小説という

ものが「限られた一部の人物に読まれる目的をもって」いるとしたら「非大衆小説家の栄光を、古い靴のように捨てたい」と応答する。彼にとって大衆とは「一部のインテリたちと芸文愛好者と学生層」の高い文化的な素養をひけらかしたり、教え導いたりする対象ではなかった（ユン・ベクナム「新聞小説と作者心境—「烽火」を書きながら」『三千里』1933.10）。それゆえ、彼にとって野談は必ずしも historical story である必要性はなかった。ユン・ベクナムはキム・ジングが決別を宣言した前近代野談を積極的に持ち出して演劇的、小説的に再構成して発表した。歴史的な話も借用したが、教化的内容よりも朝鮮を含めた東アジアの王朝史の秘話とその主たる部分を構成した。また、庶民たちの生活の中で起こりうるような事件を創作して高い大衆親和力を見せた。つまり、彼の野談は「洗練した説話でありながら神秘的な歴史物語」でもある性格を見せたのである。大衆は歓呼して迎えざるをえなかった。

ユン・ベクナムの登場後、啓蒙運動的性格の野談は急激に衰退する。野談運動の中核だったキム・ジングと、運動的野談を最初から求めていなかったユン・ベクナムが同じ舞台に立ったのは、1928年の1周年記念野談大会が最初にして最後であった。その後、キム・ジングの名前が野談関連記事に掲載されることはごく稀になったが、ユン・ベクナムは1930年代野談界のスターとして急浮上した。

3. ユン・ベクナムの巡回野談大会—越境する野談大会

31年5月から約二ヶ月間、忠清道、全羅道、

慶尚道の朝鮮半島南地方でユン・ベクナムの名

前を単独で掲げた『東亜日報』主催野談大会が最初に巡回を開始した。32年から33年にかけては京城を中心に南北に200～250km以内の散発的野談大会が開催されるが、これはユン・ベクナムが当時、朝鮮語ラジオ放送の担当者になってラジオ放送に集中した時期だったので、京城を長く離れることができなかつたためと推測できる。33年11月には黄海道と平安道を中心に巡回野談大会があり、34年1月から3月の間にはたった二回の京城での野談公演のみであった。この三ヶ月間、34年3月に出版される『朝鮮野史全集』刊行を準備していたと思われる。34年4月からは約一ヶ月半にわたり、京城から出発して、咸鏡道を経て、初めて国境を越えて間島まで進出する。その後、約1年間、京城を中心に、首都圏地域に限られた野談大会だけを開催しているが、これはユン・ベクナムが34年秋、最初の野談専門雑誌である『月刊野談』を創刊し、その準備作業に集中した時期と一致する。35年に黄海南道を巡回して、36年には本稿で最も注目したい巡回地域、すなわち満州の主要都市での巡回公演が、新聞記事を通じて確認できるのである（『東亜日報』1936.4.23、4.24、4.26、4.28、5.15）。

36年頃、ユン・ベクナムは、家族を連れて急に満州へ移住する。正確な移住時期は彼の知人たちが残した記録と研究者たちの間でも見解が一致していないが、およそ36年頃だったと見るのが最も妥当である。34年秋に創刊した『月間野談』は39年10月まで発行されるが、ユン・ベクナムの編集主幹としての実質的な業務期間は創刊後約1年間だけだったのであり、37年1月から約1年半の間、彼が『毎日新報』

に連載した作品が満州に移住した朝鮮の農民たちの人生を描いた『事変前後』だったことから、35年末あるいは36年のいつかは特定できないが、移住し、移住生活の経験をもとに小説連載が可能になったものと思われる。

ユン・ベクナム個人の移住という出来事と野談大会の満州進出が偶然の一致によって起こった可能性も完全に排除することはできない。つまりユン・ベクナムが満州に移住したために、彼がいる満州で野談大会が開かれ、そのような偶然を通じて野談の市場が朝鮮半島を越えて満州へ拡張された可能性である。なぜかというところ、ユン・ベクナムの満州移住が事前計画を通じて行われたことではなかつたような状況があったからである。ラジオ野談と野談大会でスターになったユン・ベクナムは漢文で書かれた前近代野談を選別し、ハンダルの読解をつけて34年3月に全12冊刊行を計画して『朝鮮野史全集』を出版し始めたが、彼のこの野心的な試みは失敗して刊行は5冊で終わり、しかも彼に大きな借金を残した。新聞の新規購読者にこの本を贈呈する（『東亜日報』1934.3.14）など、『東亜日報』の後援もあったが、借金をすべて返済することはできなかつたという。それ故、時期的に考えればユン・ベクナムが『月間野談』を創刊した理由には、『月間野談』販売で稼いだ金で借金を返済する目的も大きく作用したとみられる。後発者であったキム・ドンインの雑誌『野談』の創刊が『月間野談』の成功を見て始まったというキム・ドンイン本人の回顧（キム・ドンイン、1976）からみれば、『月間野談』は商業的にはある程度成功したが、ユン・ベクナムが演劇、映画、そして『朝鮮野史全集』など

の相次ぐ失敗で負った借金を全部帳消しにするほどではなかったのである。それ故、借金問題を解決できず、満州へ逃げるように移住したという意見は説得力が高い。そうだとすれば、ユン・ベクナムの移住は満州への活動領域拡張と

いう大きな抱負によって事前に計画されたことではなく、したがって野談の満州進出も、ただの偶然だったということになるのだろうか。

35年に刊行されたキム・ドンインの雑誌『野談』の販売支店を確認した結果、36年6月、『東



図 1. ユン・ベクナム巡回野談大会経路 (1931-1936)

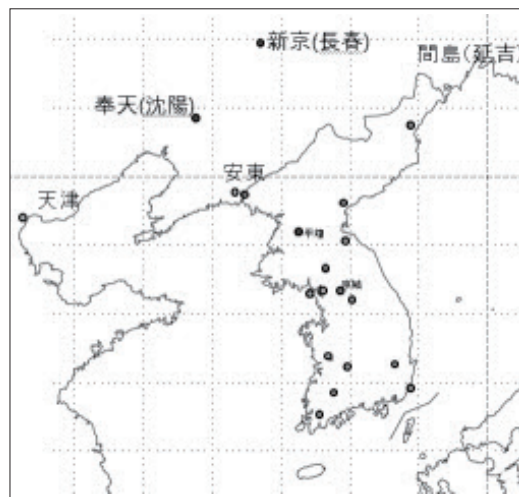


図 2. 雑誌『野談』の販売支店 (1936)



図 3. 1936年鉄道路線 1



図 4. 1936年鉄道路線 2

亜日報』支局の主要都市と雑誌『野談』の販売支店がほぼ一致することが分かる（キム・ドンリ記念事業会、2013：29-31）。雑誌『野談』の販売支店は、朝鮮半島を越えて満州にまで設置され、また満州を越えて中国本土の天神まで確認されるが、まずこの事実より明らかになるのは、36年4月と5月にかけて半月の間に展開

された野談大会の満州進出はユン・ベクナム個人の移住が決定的な契機を提供した可能性はあるものの、それだけで消費市場形成を説明することはできないという点である。雑誌『野談』の満州地域の販売支店の設立は36年4月と5月の間行われ、ユン・ベクナム野談大会と同時期のことだったからである。

4. 満洲と日本内地の野談消費者

4.1 母語使用による限界

それなら、野談の満州への拡張はどのようにして可能だったのだろうか。ここで満州への進出にこのようにこだわるのは、他の朝鮮の娯楽ジャンルより野談が持つ海外進出の限界が大きいからである。野談はレコード、映画など他の娯楽ジャンルと異なり、当時海外進出の可能性が根本的に乏しいジャンルであった。各種メディアを通じて野談が急速に朝鮮民衆に愛されたのは、親しみ深い素材、比較的少ない費用、そしてハングルと朝鮮語を使用したからであった。パンソリ・レコードも朝鮮語で発売されたが、基本的に音楽ジャンルは音律を楽しむことができれば、言語にあまり拘らないので、パンソリ・レコードは日本市場で成功することができた。映画の場合、初期海外進出作は朝鮮語で製作されたが、映像だけでも意味伝達が可能であったし、本格的海外進出が企画された40年代には日本語で製作された。音律も映像もなく、ひたすらハングルと朝鮮語で物語を伝達す

る叙事ジャンルである野談の海外市場進出は、不可能に近いと言える。無論、レコードと映画の日本市場進出はまた、他の変数である「朝鮮色」、つまり植民地の異国的特性を日本の消費者たちが楽しむことができたため可能になった。それ故、映画の場合、朝鮮人俳優たちが日本語で演技をするようになった時には、むしろ、酷評と興行失敗という結果をもたらした。野談の素材を朝鮮的なものと定義することの問題性に対する議論も確かに必要だが、ここでは、ただ言葉と文字だけで海外消費者が期待する異国的な魅力を表現するには、野談には限界があったということに焦点を当てたい。つまり、朝鮮語とハングルを使用する野談は、海外の消費者にとってまったく魅力的ではなかった。それならば、満州で行われた野談大会の観客、そして雑誌『野談』の読者は誰であったのであろうか。

4.2 満洲と内地日本における野談市場形成可能性の模索

1930年代半ばの鉄道路線図（図3と図4）を

確認してみよう。ユン・ベクナムの巡回公演経

路、『東亜日報』支局、雑誌『野談』の販売支店のいずれもが鉄道の路線図と重なっていることが分かる。ユン・ベクナムが鉄道に乗って巡回野談大会場所に移動したように、また、ユン・ベクナムが鉄道に乗って満州へ移住したように、朝鮮語とハングルを使用する朝鮮人たちは鉄道に乗って満州へ移住し、そこで野談雑誌を読んで野談大会の観客となったのである。満州に移住した在満朝鮮人の数は、ユン・ベクナムの野談巡回公演があった1936年には約90万人であり、朝鮮半島内の朝鮮人人口約2250万の4%に達する（パク・ギョンスク、2009：52）。朝鮮人たちの野談消費が行えるような市場が十分に形成できる規模だったと言える。

ところが、ここでまた、確認しておくべき問題がある。日本内地市場はどうだったのか。野談の消費者が、野談を聞けば、または読めば理解出来る朝鮮人たちに限定されるとしても、1936年約80万人（パク・ギョンスク、2009：52）だった在日朝鮮人たちは十分野談消費市場を形成できる規模であった。しかし他方で、たとえ内地日本で一度の公演が行われたとしても、野談が日本内地で市場を形成したとまで判断できる記録は、確認されていない。

現在、新聞記事を通じて確認できる野談の内地日本市場への進出計画に関する痕跡はたった三つである。最も早いのは1930年7月4日付け『朝鮮日報』の記事で、ユン・ベクナムが広島ラジオ放送を通じて野談を口演するという予告だった。しかし、実際には放送が突然中止され、内地日本ラジオの電波を通じて野談が放送されることはその後もなかった。二番目は東京でキリスト青年会が主催した行事にキム・ジ

ングの野談公演があったという1935年5月25日付け『朝鮮日報』の記事である。1935年は既にキム・ジングの朝鮮における野談活動がほとんど行われなくなった時期であり、彼の教化運動的な野談の公演も朝鮮ではなくなった。それゆえ、東京で行われた同イベントに彼がどのようなルートで参加することになったのかは定かではないが、朝鮮の人気野談家として招待されたとは思われない。最後に野談家ユ・チュカンが含まれた談友協会の会員たちが日本各地を巡回する予定であるという1942年2月27日付け『毎日新報』の記事が確認される。42年に戦局が不利になっていく中で、内地の下層労働者として働いていた在日朝鮮人たちを対象に徴兵を督励するための派遣が計画されたと推測できるが、実際に派遣が行われたかは新聞記事のみでは確認できず、おそらく実現しなかった可能性が高い。なぜなら、同年10月から約四ヶ月間、徴兵趣旨の野談漫談部隊が内地ではなく朝鮮半島の各地を巡回したが、この時は予告記事だけでなく、この巡回の旅程を記録する記事が翌年6月まで続き、5月には朝鮮軍から野談漫談部隊が感謝状を受けたという記事まで確認できるのに対して、内地日本巡回に関する続報は一つも確認できないからである。徴兵趣旨の行事は当時、総督府の広報機関の役割を果たしていた『毎日新報』にとっては最も重要なものとして分類される記事内容の一つであったことを思えば、これに対する後続の記事が一つも存在しなかったのは奇妙なことであり、この計画がキャンセルされた可能性は十分にある。結局、この三つの記事から推測すると、内地日本では野談の消費市場は形成されていなかったと

結論付けられるのである。何よりも、ユン・ベクナムの野談活動が最も活発であった1929年から36年までの間、一度も日本で野談大会が開催されなかったという点は、野談を理解できる朝鮮人が存在するだけでは、野談消費市場が形成されるに十分な条件であるとは言えないということを間接的に示唆している。日本の主要

都市にも、『東亜日報』をはじめ、朝鮮の民族資本新聞社の支局は存在し、舞踊・音楽・演劇公演や映画上映などの行事が新聞社や宗教団体により開催されたという事実を踏まえれば、野談の消費市場を形成させるための、これらのジャンルとは異なる条件に対する追跡が必要となるのである。

5. 野談大会開催の二つの条件

帝国の消費市場という観点から見て、野談の空間がこのように配置された理由は何だろうか。 どうして満州は可能で、日本内地は不可能であったのか。

満州と内地日本の相違を野談市場形成可能性の点で具体的に把握する前に、巡回野談大会が開催される条件についてまず説明してみよう。それは大きく内容的条件と物理的条件に分けられる。

まず、内容的条件として「政治的健全性」が欠かせなかった。植民地朝鮮民衆の近代的啓蒙のために野談大会を計画したキム・ジングの場合、朝鮮総督府にとっては不穏な思想集会として認識されがちだったため、野談大会はしばしば同席した警察によって中止されること（『東亜日報』1928.9.16）もあれば、検閲条件付きの開催のみ許可される場合（『中外日報』1928.6.4）もあった。このような政治的問題によってキム・ジングの野談大会は、キム・ジングと新聞資本の意欲的な計画にまで至らず、京城、開城、平壤、忠清道の一部地域へとその範囲が限られた。また啓蒙的素材と、社会運動家であるキム・ジングの話術不足のために、消費

者の持続的な関心を集めることに失敗した。彼が『朝鮮日報』の特集記事で、「残念だ」と書いたように、彼が啓蒙の対象として定めたのは、女性と学生だったが、実際にキム・ジングの野談大会に来た観客たちは、成人男性が多数（『朝鮮日報』1929.12.8）であり、おそらく新聞メディアへの接近性が高く、時局に関心が高い者たちが主な観客層だったのである。キム・ジングが京城から遠い地方都市まで行けなかったのは、政治的問題もあったが、彼の観客動員力が高くなかったことを示唆している。このように内容的条件で問題があったキム・ジングと異なり、この問題をすべて解決し、全国巡回野談大会を実現させたのがユン・ベクナムとその後の野談家たちである。特に、おもしろい素材で観客をとりこにする話術を持っていたユン・ベクナムは、朝鮮総督府との政治的摩擦の記録が一件も残っていなかったほどに、植民当局が望む「政治的健全性」も維持したために、野談大会の範囲拡大に大きく寄与した。

次に、巡回野談大会開催の物理的条件を見ると、まず、主催の中心は、『朝鮮』、『中外』、『東亜』など、朝鮮の民族新聞資本の各支局であり、

これを地方で後援したのは、各地方の朝鮮人有力者たちだった。地方の有力者たちは、大会場所を紹介・提供し、また大会後には野談家たちと交流しながら、野談大会地方巡回の持続に大きな役割を果たした。次に移動の便利さが挙げられる。野談は当時、移動娯楽の中でも最も簡便な移動条件を持っていた。代表的移動娯楽だった演劇と映画の場合、演劇は多数の人員が一度に移動するのに費用がかかり、映画は劇場と少なくとも必ず映写機は必要だった。しかし、野談の場合、野談家一人さえいれば公演が可能だったので、移動に必要な費用を最小化することができた。朝鮮半島内部の鉄道は、ユン・

ベトナムが野談活動を始める1928年までには全国的に敷設が完了していたため、ユン・ベトナムにとって全国的移動の条件は整っていた。その後、30年代に満州鉄道路線と朝鮮半島の路線が連結された。1934年にユン・ベトナムが間島を皮切りに、国境を越え始めたことは、両路線の連結と深い関わりがある。しかし、移動の便利さだけで野談の満州進出を説明するのはあまりにも単純である。ここで注目したいのは、巡回公演開催に協力した地方有力者たちの存在と、満州と日本が朝鮮の移民者たちの特性の相違である。そしてこの相違を発生させたのは、帝国日本の朝鮮人移民政策であった。

6. 野談消費市場の配置と移民政策—可能と不可能の条件

日本政府は1920年代、植民地朝鮮から米を安定的に供給する政策を推進したため、朝鮮産米は安い値段で日本に流入していたが、問題は、この政策が20年代末に日本の農村社会に対して直接的な打撃を与えたことである。それゆえ、日本政府は方針を変え、朝鮮米の流入を制限（平賀明彦、2003）したが、これにより、朝鮮の農村で労働力過多となり、農村社会が急速に疲弊して行った。そのため朝鮮の農村から日本への労働力の大規模な流入が起こり（パク・ギョンスク、2009：52）、都市下層労働者となるが、この際、経済大恐慌とあいまって、日本の都市労働者社会の不満が高まり、衛生状態の悪化と治安の不安定化を招いた。それゆえ、日本社会で朝鮮労働者の流入を制限する必要性が喧伝されるようになる（西成田富、1997）が、これを受けて朝鮮総督府は、満州へ

の朝鮮農民移住政策を推進する。朝鮮総督府としては、朝鮮人口の80%を占める農村人口の貧困化による朝鮮社会の疲弊化を防ぐために、農村の過剰労働力問題を解決しなければならなかったが、日本への流入が渋滞した場合、残る方法は満州しかなかった。この朝鮮総督府の計画は、日本政府の保留決定によりしばらく漂流するが、33年、朝鮮半島南部地域の大洪水と北部地域の寒害で全国的に発生した大量の被災者が、貧窮した農村を離れ、再び大挙して日本に流入し始める。これによって最初は朝鮮総督府の移民政策に否定的であった日本政府も、朝鮮人の流入を満州に差し向けるために政策の推進を検討することになる。その際、朝鮮総督府はこの移民政策が朝鮮、日本、満州の三者ともに有益であると主張した（朝鮮総督府、1933）。つまり、朝鮮は農村社会の疲弊化を脱し、日本

は朝鮮人の流入を防ぐことができ、新たに建設された満州国ではその後の農地開拓と農業発展に必要な熟練された朝鮮の農民たちが大きな役割を担うということであった。満州へ移住した朝鮮人は、30年代以前にもすでに大勢いたものの、彼らの安定的な定着を保障する政策的・社会的保護装置がなかった。大多数は中国人地主に属する小作農として苦しい生活を強いられており、広い地域に点在していた。しかし、31年の満州事変をきっかけに在満朝鮮人たちは安全確保のために集結し始める。34年、ユン・ベクナムの間島地域巡回公演が可能になったのも、このような在満朝鮮人社会の集結と無関係とは言えない。1935年5月朝鮮人満洲移民会社の設立計画の公表から活発になった移民政策によって35年からは朝鮮の農村社会の大々的な集団移住が始まる。特に、労働力過多になってしまった小作農・自作農のみでなく、地主までが疲弊した朝鮮の農村を離れ、満州へ集団移住し、この地主たちが在満農村社会の求心的な役割を果たすのである。

自作農や小作農だけでなく地主を中心に一緒に満州へ移住し、既に移住していた移民集団と融合して、朝鮮人が集結する農村社会が形成された。ここで朝鮮人地主たちがこの農村社会の求心的な役割を果たし、朝鮮人学校も立てるなど、在満朝鮮人農村社会の安定化に向けて文化事業をも展開する。説明したように野談大会は新聞社支局だけでなく地方有力者たちの協力が不可欠だったが、朝鮮内部の農村社会が集団で満州に移住するようになり、野談大会開催の物理的要件がおのずと満たされたのである。このように日本、朝鮮、満州という三者の政治的

変化の中で、政治的に不穏でもなく、すでに朝鮮の農民たちに愛されてきた野談の、満州市場への進出は、朝鮮総督府と満州国政府にとってもあえて妨げる必要がなく、むしろ移住を成功させ在満朝鮮人社会を安定化するためにも望ましいものだったと考えられる。

それに対して、内地日本の場合、在日朝鮮人たちはそのほとんどが都市に流入し、都市下層労働者となった。農村に流入した労働力もあったが、これらは日本人地主に属しているため、朝鮮人地主が中心となる在日朝鮮人の集団農村社会の形成は不可能であった。最も長い間、在日朝鮮人のコミュニティーを形成してきた留学生社会は、在日朝鮮人たちのための演説会、講演会、音楽会などを主催したが、民衆娯楽であった野談の主な消費者層ではなかった。1920年代後半から朝鮮の農村社会を離脱し、日本に大量に流入し、都市の下層労働者層を形成した在日朝鮮人たちは、経済・政治・社会的差別の対象であった。彼らの集会は、たとえ文化活動が目的であったとしても、治安維持にとって危険要素であり、政治的に不穏なものと考えられるようになったので、留学生社会はもちろん朝鮮人労働者階層のための娯楽イベントには、いつも警察が同席して監視した。その他、キリスト教団体が新聞社支局とともに在日朝鮮人たちの集会の開催に努めたが、夜学運営も日本政府の許可を受けることができない状況下では、在日朝鮮労働者のための娯楽イベントには限界があった。

このようにして、日本、朝鮮、満州をめぐる移民政策の変化により、朝鮮人移民者たちを対象にした朝鮮民衆娯楽の進出の範囲が規定され

たのである。つまり、帝国日本の大陸進出過程の中で、野談が帝国の特定の政策を広報する役割を務めていなかったにもかかわらず、移民政策とともにのおのずと野談も満州へ市場を拡大することができたのである。一方、朝鮮人の流入

7. 終わりに

本稿は植民地朝鮮の近代民衆娯楽ジャンルであった野談を通じて、近代東アジア地域体制における大衆文化の消費市場の拡張とその限界を確認することから出発した。従来の研究は、植民地時期の大衆文化を限られた空間、すなわち国民国家の消費市場内でのみ分析するという限界を持っていた。このような傾向は、植民地大衆文化の越境を考慮の外に置くことで、1930年代における短くも華やかであった植民地朝鮮内の近代性と、その近代性が後の戦争期に植民性に代替される大衆文化の「暗黒期」という対比構造を強化させてしまう。しかし、一連の植民地近代性研究で批判されたように、近代性と植民性は時期的に分けられて存在したのではなく、近代の始まりとともに両立してきたのであり、その両者のいずれもが近代の本質的な構成要素なのである。

本稿では、1930年代野談界のスターであったユン・ベクナムの巡回野談大会と関連した各種の新聞雑誌資料および当時の移民政策資料をもとに、野談市場の、朝鮮半島の越境と満州への拡大がいかなる脈絡から可能となったかを追跡した。その結果明らかになったのは、野談が、1920-30年代の資本主義の危機の中で、農村社会の貧困を避けて満州へ移住した朝鮮の農民た

を制限する政治・社会的情勢の中で、在日朝鮮人たちの集結を不穏な政治的行動と見なした内地日本では、野談の消費市場が形成されえなかったのである。

ちとともに、その消費市場を満州に拡張したこと、またこのような拡張は、当時の過剰労働力で農村社会の疲弊化を解決しようとした朝鮮総督府や、朝鮮の農村人口が日本に流入するのを防ごうとする日本政府、そして満州国の安定化のために朝鮮の農村労働力を必要としていた満州国、この三者の利害関係の中で行われたというのが、可能かつ有力な説明であるということだ。

結論を述べれば、野談の市場拡大が明らかにしたのは、1930年代の世界的資本主義の危機、そして日本の膨脹政策によって強化され始めた東アジア地域体制の中で、日本、朝鮮、満州が不平等な市場経済を構成していく過程において、植民地朝鮮人が資本に押されて越境し、宗主国が承諾した範囲内で日常を生きた姿であった、ということである。

しかし、本研究で分析した野談市場の拡張と日本の大陸政策との関係は、まだその可能性を確認する段階に止まっており、両者の一層確実な関係性を立証するためには、満州国内の文化政策とのより緊密な関連性を明らかにする作業が今後の課題として求められる。また、最終的に筆者が関心を寄せている事柄として、戦間期、戦争期そして戦後に続く植民地近代性の連

続性、すなわち植民性と近代性が戦争を前後して別に存在したのではなく、近代の始まりとともに両立してきた本質的構成要素であったことを確認するためには、ユン・ベクナム以降の野談家たちの戦争期の活動が戦争システムとどの

ような関係の中で行われており、それが野談市場にいかなる影響を及ぼしたかについての分析が必要になるだろう。この二つの課題については別稿で取り組みたい。

註

- ¹ 1990年代後半から2000年代半ばまでの植民地近代性研究の流れについては、(ジョ・ヒョングン、2006:49-82)も参考になる。
- ² 植民地朝鮮の映画市場の越境に対する最近の作業としては、(イ・ファジン、2015;2016)が参考になる。
- ³ 42年10月からわずか四ヶ月の間に行われたシン・ジョンオンの野談漫談部隊の移動公演は戦間期6年間のユン・ベクナムの野談巡回公演の回数に匹敵する。この際の拡大は、空間的なものというより、短期間に朝鮮半島の隅々まで野談が浸透した深さの次元だと言える。
- ⁴ 社会講談は、伝統的な講談の改造と一連の「騒動」を受け手に想起させることで民衆教化を目指した大正期の社会運動の一つの戦略であった(中山弘明、2001:57)。
- ⁵ 当時植民地朝鮮民衆の文盲率に関する『東亜日報』の記事では、1921年99%、1922年99%、1925年絶対多数、1927年対多数、1928年80%以上という数値または表現が確認できる。すなわち、1920年代後半でもハン글識字率はまだ20%未満だったのである。

参考文献

【新聞・雑誌資料】

『東亜日報』、『朝鮮日報』、『毎日新報』、『中外日報』、『開闢』、『三千里』、『月間野談』、『野談』

【機関資料】

朝鮮総督府 (1931)「〔極秘〕鮮人移民社会設立計画案」
朝鮮総督府 (1933)「〔極秘〕朝鮮人口問題対策」
朝鮮総督府 (1941)『国土計量調査参考資料—朝鮮人口に関する資料』朝鮮総督府企画部第一科
満洲国務院総務庁 (1943)『康德七年臨時国勢調査報告』全国編

【本・論文】

안중화 (1962)「한국영화사에 빛나는 사람들 - 예단의 변종 윤백남」『女苑』女苑社
(アン・ジョンファ (1962)「韓国映画史に輝く人たち—芸壇の変種ユン・ベクナム」『女苑』女苑社)
조현근 (2006)「한국의 식민지근대성연구의 흐름」공제육, 정근식편『식민지의 일상 - 지배와 균열』문화과학사 49-82
(ジョ・ヒョングン (2006)「韓国の植民地近代性研究の流れ」ゴング・ゼウク、ジョン・グンシク編『植民地の日常—支配と亀裂』文化科学社 49-82)
김동인 (1976)「문단 30년사」『김동인전집』6 三重唐
(キム・ドンイン (1976)「文壇30年史」『キム・ドンイン全集』6 三重唐)
김동리기념사업회 (2013)「회상」『김동리문학전집 30』季刊文芸 29-31
(キム・ドンリ記念事業会 (2013)「回想」『キム・ドンリ文学全集 30』季刊文芸 29-31)
곽근 (1997)「윤백남의 생애와 소설」『東岳誤文論集』(32) 403-427
(カク・クン (1997)「ユン・ベクナムの生涯と小説」『東岳誤文論集』(32) 403-427)
이화진 (2015)『전쟁과 극장 - 전쟁으로 본 동아시아 근대극장의 문화정치학』소명출판
(イ・ファジン (2015)『戦争と劇場—戦争から見る東アジアにおける近代劇場の文化政治学』ソミョン出版)
————— (2016)『『소리의 정치— 식민지조선의 극장과 제국의 관계』현실문화

- (2016) 『「音」の政治—植民地朝鮮の劇場と帝国の関係』 現実文化)
- 오청원 (1993) 「윤백남의 생애」 『윤백남의 작품세계』 문화체육부
- (オ・チョンオン (1993) 「ユン・ベクナムの生涯」 『ユン・ベクナムの作品世界』 文化体育部)
- 박경숙 (2009) 「식민지시기 (1910-45) 조선의 인구동태와 구조」 『한국인구학』 32 (2) 29-58
- (パク・ギョンスク (2009) 「植民地時期 (1910-45) 朝鮮の人口動態と構造」 『韓国人口学』 32 (2) 29-58)
- 노정팔 (1984) 『휴일없는 메아리』 한국교육출판사
- (ノ・ジョンバル (1984) 『休日なしのエコー』 韓国教育出版社)
- 平賀明彦 (2003) 『戦前日本農業政策史の研究—1920-1945』 日本経済評論社
- 伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編 (2010) 『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』 岩波書店
- 水野直樹 (2002) 「植民地支配政策史研究の現状と課題」 『世界の日本研究 2002—日本統治下の朝鮮：研究の現状と課題』 京都：国際日本文化研究センター 60-62
- 中山弘明 (2001) 「「社会野談」という戦法—世界戦争と民衆芸術」 『国文学研究』 早稲田大学国文学会
- 西成田富 (1997) 『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』 東京大学出版会
- Barlow, Tani E. (1997) *Formations of Colonial Modernity in East Asia*, Durham, NC: Duke University Press
- Mignolo, Walter (2000) *Local History/Global Design: Coloniality, Subaltern Knowledges and Border Thinking*, Princeton: Princeton University Press
- Shin, Gi-Wook & Michael Robinson eds. (1999) *Colonial Modernity in Korea*, MA: Harvard University Press



朴 多情 (ばく・だじょん)

[専攻領域] カルチュラル・スタディーズ、メディア史
 [所属] 東京大学大学院学際情報学府 博士課程

The Expansion of the *Yadam* Consumption Market and Japanese Expansionist Policy during the Interwar Period: focusing on Baeknam Yun's *Yadam* provincial performances in the 1930s.

Dajeong Park*

This paper explores the expansions and limitations of popular culture consumption in colonial Korea within the wider East Asian regional system/context during the 1930s by examining *Yadam*, a modern Korean narrative and performance genre.

This research challenges previous academic interpretations that focus on domestic popular culture consumption in the colonial period within the boundaries of the nation state. While existing perspectives emphasize a short but “splendid” flourishing of modernity during the 1930s that was subsequently replaced by a colonial period of cultural stifling during the wartime of the 1940s, this research explores the previously excluded transnational spread of ‘Chosun-esque (Korean)’ popular culture by adopting the colonial modernity research arguments regarding the periodic coexistence of modernity and coloniality.

Magazine and newspaper articles about Baeknam Yun's *Yadam* provincial performances as well as internal publications of the Japanese Government General of Korea during the 1930s were analyzed to establish a regional context of the *Yadam* market expansion beyond the Korean peninsula to Manchuria.

The research reveals how the consumption market spread with Chosun farmers emigrating to Manchuria in order to escape impoverished depression era rural Chosun, which was a way for the Japanese Government General to alleviate surplus labor and rural poverty, while it was in the interest of the Japanese government to prevent such influx to mainland Japan, and also served demand for farming labor in Manchukoku.

In conclusion, by examining the expansion of the *Yadam* market situated in the solidifying East Asian regional system during the 1930s, the research traces how people moved and lived across and within the imperial confines of colonial Chosun whilst the formation of an unequal regional market economy.

Doctoral Student, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies The University of Tokyo

Key Words : *Yadam*, colonial modernity, popular culture, Japanese expansionist policy, East Asian regional system.